

宮 澤 賢 治 研 究 叢 書

注文の多い料理店

研究 I 続橋達雄編



宮澤賢治宮書叢書

注文の多い料理店研究 I

続橋達雄 編

宮澤賢治研究叢書⑤ 『注文の多い料理店』研究Ⅰ

編者—— 統橋達雄

発行者—— 武田季男

発行所—— 株式会社學藝書林 東京都中央区八丁堀二三五 電話〇三五五二五九〇 大塚管東京一〇八二

印刷・製本—— 東洋印刷株式会社

発行—— 一九七五年十二月十日第一刷

© 1975 Tatsuo FUZUKIHASI 1395-317510-1000

目
次

I 童話集の刊行

『注文の多い料理店』 森荘巳池——9

『注文の多い料理店』 刊行顛末記—附、『赤い鳥』 広告の事— 堀尾青史——68

『注文の多い料理店』 私記 及川四郎——74

『童話集』 作品の制作年次 恩田逸夫——78

『童話集』の原型―振替用紙裏の広告文― 恩田逸夫 ― 101

II 童話集・総論

童話集『注文の多い料理店』序説 統橋達雄 ― 113

賢治童話集の序文 恩田逸夫 ― 140

『注文の多い料理店』論―宮澤賢治論5・6― 佐藤通雅 ― 150

解説 統橋達雄 ― 185

『注文の多い料理店』研究Ⅰ

I
童話集の刊行

『注文の多い料理店』

森 莊 巳 池

その1 刊行者たちに就いて

宮澤賢治の童話集『注文の多い料理店』の刊行されたのは、大正十三年（一九二四年）十一月十五日である。

私がそれを始めて見たのは、盛岡市中の橋通り新聞販売店「東北堂」が隣りに経営する「北隆館書店」であった。場所は、いまのデパート松屋の隣り、オモチャ屋のあたりである。

この北隆館書店は、入つて左手の棚には、新刊の本を置いていたが、右手に二つある大きなガラス戸棚の

宮澤賢治

イーハトヴは一つの地名である。強て、その地点を求むるならばそれは、大小クラウス達の耕してゐた、野原や、少女アリスが辿つた鏡の國と同じ世界の中、テバンタール沙漠の遙かな北東、イバン王国の遠い東と考へられる。実にこれは著者の心象中に、この様な風景を以て実在したドリムランドとしての日本岩手県である。

ここでは、あらゆる事が可能である。人は一瞬にして氷雪の上に飛躍し大循環の風を従へて北に旅する事もあれば、赤い花杯の下を行く蟻と語ることも出来る。罪や、かなしみでさへそこでは聖くきれいにかがいてゐる。深い樹の森や、風や影、肉の草や、不思議な都会ペーリング市まで続く電柱の列、それはまことにあやししくも楽しい園土である。この童話集の一行は実に作者の心象スケッチの一部である。それは少年少女期の終り頃からアドレッセンス中葉に対する一つの文学としての形式をとつてゐる。

この見地からその特長を数へるならば次の諸点に帰する。

中には、古い六法全書や辞典の類など売れない本、余つた本などをすき間だらけに並べてあつた。しかもその大きなガラス戸棚の前には、絵本などを並べて置く台があつたり、歩きみちのところには、荷物や自転車置いてあつたりして、その戸棚は、ていのいい物置のようになっていた。

『注文の多い料理店』は、はじめから売れないと経営者に見当をつけられたものか、或は、売つてくれと頼まれた冊数の量が多かつたものか、そのガラス戸棚にごつそりと何十冊か並んでいたのである。

私は、その『注文の多い料理店』が、いつ行つて見ても一向に減らないのが気がかりになつて見ていた。岩手県人が書き、そして美しく装幀されたこの本を、何故ひとびとは買わないのか、疑問であつた。(そのころ県人の著述と言えば、たいいてい、げつそりするような、みつともない本だつた。)——とは言え、私はその本を買わなかつた。北隆館の小暗いガラス戸棚の前で、中味は、みんな読んでしまつた。

北隆館書店の店番をしているのは、新聞の集金に来る「ツ

一、これは正しいものの種子を有し、その美しい発芽を待つものである。而も決して既成の疲れた宗教や、道徳の残滓を色あせた仮面によつて純真な心意の所有者たちに欺き与へんとするものではない。

二、これらは新しい、より好い世界の構成材料を提供しようとはする。けれどもそれは全く、作者に未知な絶えざる驚異に値する世界自身の発展であつて決して畸形に捏ねあげられた煤色のユートピアではない。

三、これは決して偽でも架空でも窃盗でもない。多少の再度の内省と分析とはあつても、たしかにこの通りその時心象の中に現はれたものである。故にそれは、どんなに馬鹿けてあても、難解でも必ず心の深部に於て万人の共通である。卑怯な成人達に畢竟不可解なだけである。

四、これは田園の新鮮な産物である。われらは田園の風と光との中からつややかな果実や、青い蔬菜と一緒にこれらの心象スケッチを世間に提供するものである。

『注文の多い料理店』新刊案内より

ルさん」という、ガラガラした威勢のいい人のよい人だつた。じつと長時間、ガラス戸棚の中から、さつぱり売れない本を出して読んでいる中学生を、彼は別に苦にもしなかつた。

のちに、私は岩手日報社に入つてから、北隆館書店の帳場に上りこんで、この人と将棋をさしたりした。いまでも、外を元気に歩いているツルさんにはときどき会う。

表紙に金文字が入つて美しい童話集『注文の多い料理店』は、中味はコットン・ペエピアに印刷されていた。そのころ、コットン・ペエピアといえは最も高級な印刷用紙であつた。インクと紙のにおいがコットン・ペエピアの本を上品にした。一流の文化人の一流の著書でない、この紙を使わなかつた時代である。

私は、のちに中学生の身でありながら岩手詩人協会をつくつて、詩誌『貌』を六号まで刊行した。その途中で、私に私の詩集を出すことをすすめた宮澤賢治は、第一号から、寄稿してくれた。

詩集刊行のことは、恐らく、賢治は軽い気持で私に言ってくれたものであろう。『注文の多い料理店』の刊行もと、光原社の及川四郎氏にでも話したものだつたらうか、手紙には、そうと思えるフシがあつたが、それが不可能になつたと見え、たいへん苦しい言いわけの手紙を私は賢治からもらつた。そして賢治は、詩集刊行の費用にでも——と、『注文の多い料理店』三十冊と『春と修羅』三十冊を、箱につめて、私に送つてよこした。

私は、詩集を出す意志もなかつた。そこで、私はその二冊の本を、一冊も売らなかつた。盛岡と東京で、宮澤賢治を知つてもらいたいと思う人たちに、一冊残らず寄贈してしまつた。そのころ私からもらつた二冊を、いまでも宝物のように持つている人も、数人はいる。

『注文の多い料理店』は、いまでは『春と修羅』と同じに、宮澤賢治の名とともに、不朽の作品群となつたが、では一体、この童話集は、どういう関係で刊行されたものであるか、それについて書く前に、鈴木三重吉と赤い鳥、そして宮澤賢治について、ちよつと触れて置こうと思う。

宮澤賢治が月三千枚もの、憑かれた人しか見られないような速度で書いた童話を、トランク一杯につめこんで、『赤い鳥』社に持ちこんだ。

賢治に見れば、まだ若かつたのだし、それらの童話が、三重吉の認めるところとなり、文名大いになり原稿料も入り、本になつて売り出されることも、たのしく空想したことであろう。このことは関登久也あての書簡にも書いてある。何しろ馬鈴薯と水とで生活していたころである。

ところが、胸ふくらまして数十日のち鈴木三重吉を訪ねた賢治に、三重吉は会わず、書生が、
「先生は忙がしくて、あの童話は読まれないといつておいでです」

と、言つて、そつくりそのまま返してよこした。賢治の失望落胆は、もちろん察せられるが、その表情は、私にはよく解る。たぶん、再び燃える内なる勇氣と精神とが、その失望落胆の暗い雲のようなものを、瞬時にして吹きとばし、重いトランクを持つて本郷の宿まで帰つてきたであらう。

「そうですか、すみませんでした」

と、彼ははいねいに、その書生にあいさつして帰つたにちがいない。

このときの書生が、実は三重吉晩年の弟子、木内高音だつたと私はのちに深沢省三氏から伝え聞いた。後年木内高音は、中央公論社で、ともだち文庫を企画した。その第一冊に、宮澤賢治の童話集を選んだ。もちろん賢治の名がポピュラになつてのことではあつたが――。

三重吉は、賢治の童話を読まないのではなかつた。たしかに読み、そして作品の中に出てくる、エスペラントを、ドイツ語かフランス語か見当をつけかねて、辞典などをひもといて、眉をひそめて見ていたといふ。

のちに三重吉に『注文の多い料理店』を賢治が寄贈したとき、三重吉は賢治に童話を注文してよこした。だが賢治の送つた作品は「タネリは一日噛んでゐたやうだつた」といふ、およそ赤い鳥風の作品ではなかつた。そのためにそれは掲載されずじまいだつた。三重吉は、

「ロシアなどなら、通用する童話だらう」

と、賢治童話について語つたと伝えられている。

さて、『注文の多い料理店』は、このトランクに一杯の童話を、全十二冊のシリーズにして出版しようとする遠大な計画の第一冊と賢治は考えていた。このことは、賢治自身で執筆・文案・構成して二色刷りで印刷し、各方面に発送した宣伝用のチラシに、はつきりと書いてある。全集や童話集などに序文として、いつわつて使われているほど、その広告文は立派である。

直接に『注文の多い料理店』を書く前に、この童話集が世に出るに至つた基盤について書くことにしよう。

(以下はすべて『注文の多い料理店』の刊行者、光原社主及川四郎氏の談話にもとづくものである。)

『注文の多い料理店』の発行署名人になつてゐるのは近森善一という人である。

近森善一氏は、及川四郎氏と同級で、高知県出身。及川・近森両氏は盛岡高等農林の同級生で、宮澤賢治は一級上であつた。

近森氏は、高等農林卒業後、盛岡中学校の博物教師を一年ばかり勤めた。それから長崎県立諫早(いさはや)農学校に三カ月ばかり在職。やがてまた母校の研究生になつて盛岡に戻つてきた。

一、二年して助手になつたが、この助手は月六十円の高給で、しかも学校に出たり出なかつたり、遂には、ハンコを庶務の人があづかつて出席簿に押してくれるようになった。近森氏の専門は農科だつたが、彼は一向に田植の時期も知らなければ、養蚕のことも知らないといつた風だつた。だが一度び、こと昆虫となれば、誰にも負けぬと自負し、かつ無暗にくわしかつた。信念あつての勉強だつたであろう。彼は頭がよく